

## 第93回麻布獣医学会 一般学術演題6

## ぶどう膜皮膚症候群の犬の視覚保持についての調査

○中原 和人<sup>1</sup>, 小林 由佳子<sup>2</sup>, 酒井 洋樹<sup>3</sup><sup>1</sup>中原動物病院(愛知県)、<sup>2</sup>ありす動物眼科クリニック(横浜市)、<sup>3</sup>岐阜大

**【背景】** ぶどう膜皮膚症候群uveodermatologic syndrome (以下UDS)は、Vogt-Koyanagi-Harada like syndromeともよばれ、1977年朝倉らによって初めて報告された。正確な病態はいまだ不明だが、メラニン色素とメラニン産生細胞を標的とする自己免疫疾患であるとされており、その病名の示すとおり、ぶどう膜と皮膚に病変が現れる。皮膚では、脱色素と白毛を、眼球では、虹彩、毛様体、脈絡膜に炎症を起こし、汎ぶどう膜炎を引き起こす。成書には、生命を脅かす疾患ではないが、網膜剥離または続発緑内障により視覚喪失することが多く、視覚予後は不良な疾患との記述がみられる。一方、同じ疾患とされる人のVogt-Koyanagi-Haradadisease (以下VKH)は比較的視覚予後の良い疾患とされる。そこで今回、UDSの視覚保持についての調査を行ったので、その概要を報告する。

**【方法】** 眼球または皮膚の病理組織検査により、無菌性肉芽腫性炎症、メラニン色素およびメラニン産生細胞の減少、マクロファージによるメラニン色素の貪食像がみられたものと、明らかな原因の見つからない汎ぶどう膜炎を発症し、免疫抑制治療により炎症は沈静されたにもかかわらず、眼底の脱色素が進行するものをUDSと診断した。診断基準を満たした症例6頭と、上記診断基準を満たし、視覚の予後が示された文献11報-17頭を対象に、犬種、性別、発症年齢、適切な治療開始までの時間、受診時の視覚の有無、受診時の皮膚病変の有無と視覚保持時間について調査した。

**【結果】** 犬種は秋田犬8頭、シベリアンハスキー4頭(ハスキー系雑種1頭を含む)、ゴールデンレトリバー、オールドイングリッシュシェパード、シェットランドシェパード、オーストラリアンシェパード、セントバーナード、ダックスフンド、イングリッシュコッカースパニエルとプードルの雑種、ブラジリアンフィラドック、ラットテリア、ボーダーコリーの雑種、ミニチュアプードルそれぞれ1頭であった。性別は、オス11頭、去勢オス3頭、メス6頭、避妊メス3

頭であった。発症年齢は中央値2歳11か月齢(8か月齢~11歳11か月齢)であった。適切な治療開始までの時間は、記載がなく不明であった2頭をのぞいて、中央値1ヶ月(0日~1年)であった。受診時視覚のあったものは9頭、無かったものは12頭で、不明が2頭であった。受診時皮膚病変のあったものは19頭、無かったものは3頭、不明が1頭であった。

視覚の保持期間は、2か月以上の経過の記載がなかったものが3頭、視覚喪失で治療を開始し、回復しなかったものおよび短期(3か月以下)で失明したものは9頭、3か月以上1年未満視覚を保持したものが4頭、1年以上視覚を保持できたものが7頭であった。

**【考察】** 2か月以上の経過の記述がなかった2報-3頭を除くと、21頭中9頭が短期に視覚を喪失しており、成書の記述通り今回の調査の中でも視覚消失例が多かった。今回の調査で、1年以上視覚を保持できた症例は、来院時に視覚があったものがほとんど(7頭中6頭)であり、来院時に視覚を保持していたにもかかわらず、短期で視覚喪失した症例は、飼主の治療アドヒアランスが低かった1症例のみであった。視覚を保持した状態で適切な治療を開始することが、長期の視覚保持に重要であると思われた。適切な治療開始の中央値は1ヶ月であったが、論文症例だけに限れば、その中央値は3ヶ月であり、視覚を保持していたのは、17頭中4頭のみであった。論文は全て大学を含む2次診療施設から発信されているが、眼科症例は、2次施設への紹介が遅い傾向があると思われた。また、1年以上視覚を保持できた症例7頭中3頭は、皮膚症状の見られない個体であった。これは、人のVKHで眼球のみに病変が出現する原田型と呼ばれるものと同じ病態がUDSに存在する可能性と、UDSでは通常眼球病変が皮膚病変に先行するため、病期を早期のままおさえこめた可能性が考えられるが、どちらにせよ皮膚病変のないことはUDS症例の長期視覚保持の指標の一つになる可能性が考えられた。